広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	作家同盟岡山支部の活動とサークル誌『鋲』『中国文芸』 : 出版ネットワークと地方性
Author(s)	萬田, 慶太
Citation	近代文学試論 , 59 : 93 - 104
Issue Date	2021-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/53454
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053454
Right	
Relation	

〔研究ノート〕作家同盟岡山支部の活動とサークル誌『鋲』『中国文芸』

― 出版ネットワークと地方性 ―

萬田慶太

一、はじめに

本研究ノートでは作家同盟岡山支部の活動について調べ、発見された資料の梗概をまとめる。サークル誌の巻号を追いながら、出版ネットワークと地方性を探っていく。

岡山の一九三〇年代サークル雑誌で残存していたのは、『鋲』（一九三四年十二月第一巻第二号）と『中国文芸』（一九三六年五月第一巻第二号、一九三六年七月第一巻第三号、一九三六年十月第一巻第四号）である。吉備路文学館の協力により、調査を行い、『鋲』一冊（現物ではなくコピー）、『中国文芸』三冊（現物）の存在を確認した。

日本プロレタリア作家同盟（以下、作家同盟）とは、戦前の日本共産党の指導を受けたプロレタリア文学者の集団である。主に中央の既に著名なプロレタリア作家で日本共産党の姿勢に賛同する者を中心として組織されていた。（同盟員に宮本百合子、小林多喜二、中野重治、蔵原惟人、徳永直など。）作家同盟はソヴィエトからの指令を間接的に受け、その文学理論に左右されていた。この頃は、一九三二年テーゼ草案の影響を受けていた。日本各地に作家同盟の支部を作り、サークルを作り、大衆に浸透しようとしたのである。これには大衆の中から多くの新人地方作家、新人地方詩人を登用しようとする動きも含まれていた。

つまり、一九三〇年代サークル活動は数々の矛盾を抱えながらも、地方の大衆の声というものを呼び起こそうとする方向性を持っていた。ところが、大衆化を進めたものとして、楽観的に一九三〇年代のサークル活動を肯定することはできない。一九三〇年代サークル活動の展開とそこに既に著名なプロレタリア文学者の参加を求めることは、政治からの知識人役割の否定でもあった。プロレタリア文学者たちは大衆と同列の一兵卒としての参加が求められた。それは大衆像のとらえ損ないであった。

一九三〇年代サークル活動は、一九二九年の四・一六事件[1]による日本共産党の瓦解、一九三四年四月の作家同盟解散によって中央にリードされた活動としては壊滅した。

このような活動の結果、一九三〇年代地方サークル誌は一般的な文学史からは取り残されてきた。しかし、一九三〇年代サークル活動は、地方が自らの手で文学作品を作り、自ら地方を語ろうとした文学史の一時期であったと言えるだろう。

ここで取り上げる『鋲』『中国文芸』は一九三〇年代の岡山の地方サークル誌である。

数少ない作家同盟岡山支部の先行研究としては、水野秋『岡山県社会運動史1～17』（労働教育センター、一九七八年八月）が挙げられる。水野は大正期から戦後に至るまで岡山運動史を叙述した。水野秋は坂本忠次らと岡山社会運動研究会を興しており、岡山の研究者間の積極的な交流と、当事者たちへのヒアリング、回想の記述など、多くの掘り起こし作業を行った。本研究ノートも水野と坂本らに負うところは非常に大きい。

しかし、水野秋『岡山社会運動史8　暗い谷間で』（労働教育センター、一九七八年八月）において、水野は岡山支部を総括する形で、以下のように結論づけている。

> いずれの関係者も「党とともに」、「党のために」と異口同音にのべており、少なくともその時点では「政治の介入」の問題性をいささかも疑うどころか、政治の決定的優位性を強調する蔵原理論をほとんど盲目的に承認していた事実をじつに率直に認めているのである。となれば、これらの運動の本質は、いわゆる文化運動というものではなく、政治運動における異色な表現であったとすらいえなくもない。

水野は岡山支部を「党」や「政治の介入」を疑わない「蔵原理論」、つまりは「一九三二年テーゼ草案」の盲信と規定している。それは文学研究の対象となるような「文化運動」ではなく、「政治運動における異色な表現」であった、つまり政治運動の文化部門に過ぎず、評価に値しないと言うのである。ところが当時中央における「党」は地下化しており、岡山とは連絡の取りようがなかったと推測される。むしろ、中央の「党」からは取り残されていたのが、岡山の当時の状況ではないか。

本研究ノートで取り上げる岡山支部のサークル誌は、作家同盟解散以降の年次のものである。どちらかと言えば徳永直らの出版ネットワークの方がサークル誌には散見する。当時のサークル員たちの認識がどうであれ、プロレタリア文学が中央では「転向」や崩壊していた時期にあたるサークル誌を見ていくことは意味がある。つまり、プロレタリア文学の最後期における、地方の「文化活動」を再考する必要があるのである。

本研究ノートでは、第二節で岡山支部史をまとめる。第三節で発見された岡山支部のサークル誌『鋲』『中国文芸』の目次リストを掲載する。第四節で『鋲』『中国文芸』の雑誌ネットワークと地方性の表象を検討する。第五節で結論をまとめる。

二、岡山支部の歴史

まず、作家同盟岡山支部のサークル活動の概略を紹介しよう。主に、岡山支部の活動史として以下まとめるものは、水野秋『岡山県社会運動史8　暗い谷間で』（労働教育センター、一九七八年十月）と岡山県社会運動研究会その他の回想の情報による。

岡山はそもそも、片岡鉄兵、片山潜、難波英夫などの東京で活躍するプロレタリア文学者を生み出した土地柄であった。そのため、まず、森田綾雄[2]が一九二四年二月に、アマチュアサークル組織として「岡山無名作家連盟」を設立する。ニュアンスとしては、「岡山作家同盟」とする

と著名作家のグループと考えられることを避けたのであろう。作家同盟岡山支部はこの組織の後継に当たる。

次いで、一九三一年に、日本プロレタリア・エスペランティスト協会（ポエウ）岡山支部が岡一太[3]を中心に成立する。全協の岡山地区委員会が発達し、松崎竜一[4]が同前峯男[5]に提案する形で、岡山プロキノ同盟ができる。これらの無名作家連盟やプロキノなどの地方独自の活動が中央と連絡をつける形で、岡山支部は設立される。水野秋は『岡山県社会運動史８　暗い谷間で』（前掲）において、以下のように記述している。

森田綾雄を中心とする日本プロレタリア作家同盟の岡山支部準備会が発足したのは、記録のうえでは三一（昭和六）年一〇月一〇日になっている。「きっかけは私が岡本武夫[6]と知り合ってからだが、小野治夫[7]、同前峯雄、榎南謙一などが主なメンバーだった。活動としては政治的なものが主で、中央との連絡はこっちからつけた。創作面では榎南の詩がめだった程度だった」と森田は語るが、厳密にいうなら同前と榎南は創立時からおくれて参加している。

岡山支部発足の「きっかけは私が岡本武夫と知り合ってから」とある。中央の回想にある「片岡鉄兵の弟子を志願していた岡本武君」（宇野真佐男「岡山プロキノのこと」プロキノを記録する会『昭和初期左翼雑誌・別巻』戦旗復刻版刊行会、一九八一年十一月）とは岡本武夫のことである。岡山の森田らと中央文壇に連なる岡本が接触し、作家同盟岡山支部は発足した。中央は岡本を重要視したが、岡山の実質的なトップは森田だったのだろう。「中央との連絡はこっちからつけた」と独自性がうかがえる。

一九三一年十月十八日には、「岡山コップ」が、森田綾雄、松崎竜一らによって作家同盟からさらに拡大する形で設立された。森田の証言によると「僕が委員長で岡本武夫が書記長でスタートしたと思う。」と証言している（水野秋『岡山県社会運動史８　暗い谷間で』前掲）。

この頃、東京のプロレタリア文学者を招いての岡山での講演会が行われた。拙論「貴司山治撮影映画『岡山と高知作家同盟の講演旅行　一九三一、十一―十二』について」（『フェンスレス』二〇一五年五月）で論じた講演旅行の映像と合致する。この講演については、『山陽新報』一九三一年十一月十九日朝刊には、「プロ文学と映画の夕　秋田雨雀氏ら岡山市公会堂へ」との予告記事が掲載されている。その他、「黒島伝治」の名前も挙がっているが、実際に秋田や黒島が来岡したかは不明である。水野も秋田や武田麟太郎などの名前を挙げているが、写真や映像にその姿は確認されていない。

岡山支部は一九三二年あたりには『突撃隊』を、一九三三年には『装甲車』というサークル誌を発行していたが、現存していない。四・一六事件が岡山でも発生し、関係者は一斉検挙される。一九三四年に作家同盟は中央でも解散する。多くの中央プロレタリア作家の転向声明が相次ぐ。その後、今回取り上げる『鋲』と『中国文芸』が発刊される。水野秋『岡山県社会運動史８　暗い谷間で』（前掲）には以下のように記述される。

三三（昭和八）年四月一二日の一斉検挙によって壊滅した旧作家同盟岡山支部のメンバーは、三四（昭和九年）に至って、またもや

森田綾雄を中心とする同人雑誌『鋲』に結集した。この段階で同前峯男や榎南謙一などが参加したようである。

「このままくたばってなるものかという意地が『鋲』に結集した。発行部数は二〇〇部で、私が市内の本屋へ委託して歩いたが、あまり売れなかった。そしてこれもわずか三号で弾圧され、発行できなくなった」と森田は語る。

同時に、榎南謙一は東京で継続していたプロレタリア詩雑誌『詩精神』同人として活躍しはじめる。『鋲』（一九三四年十月）には槇本楠郎、[8]貴司山治なども書いており、後述する中央の雑誌の『詩精神』のネットワークが生かされた可能性も高い。岡山のサークル誌のいずれかの段階で、榎南のプロレタリア詩壇への登用が行なわれたのだろう。

『岡山県史　第十二巻　近代Ⅲ』（岡山県史編纂委員会、一九八九年六月）には、項目執筆者不明ながら『中国文芸』の項目が設けられている。

プロレタリア文学のうち、一九三六年（昭和一一）には『中国文芸』が発刊された。この文学雑誌を発行した代表者は守安理で、中国文芸社は岡山市野田屋町にあった。同誌第一号第三号によると、この同人には舞原浩一・池宗一郎、詩では貝原嘉文・田中英士[9]・山崎斎・榎南謙一、短歌では、大山春子・御船幸枝・栗山照一、評論では糸岡研三・小山一太らの名前がみえる。この雑誌に「救農工事」と題する創作を池宗一郎が載せているが、一九三〇年代昭和恐慌下の時局匡救事業と部落の小作争議の様子などが如実に描かれている。

『中国文芸』の発行年を確認すると、少なくとも作家同盟岡山支部の活動は弾圧を挟みながらも、一九三六年十月頃までは継続された。しかし、岡山支部の活動は常に弾圧と隣り合わせであり、やがて解体していったようだ。

以上、見てきたように、複数の岡山の団体が中央と関わりながら設立されたのが、作家同盟岡山支部であった。第三節には、『鋲』『中国文芸』の目次リストを掲げる。

三、『鋲』『中国文芸』の目次リスト

以下、岡山支部のサークル誌である『鋲』『中国文芸』の目次リストを示す。

◎『鋲』目次リスト

『鋲』一九三四年七月（第一巻第一号）（予告のみ発見されているので実際の目次は不明である。）

小橋武「風刺文学に就いて」（評論）、北川三郎（森田綾雄のペンネーム）「プロレタリア文学に於けるウルトラ左翼と民主主義」（評論）、榎南謙一「春先の足音」（詩）（他一篇）、武田一郎「秋祭」（小説）、備前二郎（瀬戸健一の旧ペンネーム）「児島湾」（小説）、町田稔（蘇本誠一郎の旧ペンネーム）「橋の上」（小説）、吉澤博「泥濘」（小説）、池宗一郎「或る転機」（小説）、榎南謙一「大陸の青年」（小説）、森

田綾夫「転身」（小説）、槙本楠郎「子供会」（小説）

『鋲』一九三四年十二月（第一巻第二号）

瀬戸健一「児島湾」（長編）、蘇本誠一郎「橋の上」（長編）、北川三郎（森田綾雄のペンネーム）「転身」（中編）、新島繁「街を歩けば」（詩）、榎南謙一「秋」（詩）、内田博「生活のはしから」（短歌）、直島毅一「時感」、吉澤博「偶感」、島田和夫「政治と文学のことゞも」（評論）、槙本楠郎「文学・交遊・著書」（評論）、貴司山治「若き作家に求む」（評論）、覆面戦士「文芸射手」、森田綾雄「編集後記」

『鋲』一九三五年第二巻第一号創作特集号予告（予告のみ発見されているので実際の目次は不明である。）

瀬戸健一「児島湾」（長編）、蘇本誠一郎「橋の上」（長編）、吉澤博「亞斯」（短編）、直島毅一「題未定」（短編）、横山純「題未定」（短編）、島田美智子「美辞」（短編）、榎南謙一「雨雲」（短編）、北川三郎（森田綾雄のペンネーム）「転身」（中編）、島田和夫「敢えて楽観主義者となる」（評論）、新島繁「最近の詩に就ての感想」（評論）、「文芸射手」、「雑記」

◎『中国文芸』目次リスト

『中国文芸』第一巻第一号

未発見

『中国文芸』一九三六年五月（第一巻第二号）

中岡敏「馬」（小説）、岩下作雄「清算」（小説）、森田文治「未納米」（小説）、入江清二郎「水攻高松城」（第二回）（戯曲）、池宗一郎「救農工事」（第一回）（中編）、小熊秀雄「甘やかされてゐる新進作家」（詩）、榎南謙一「菜の花月夜」（詩）、栗山照一「うれひ」（短歌）、「「中国の一日」スケッチ募集」、「第一回「文学評論賞」候補作品について」、池宗一郎「編集後記」

『中国文芸』一九三六年七月（第一巻第三号）

舞原浩一「捨てる」（小説）、池宗一郎「救農工事」（第二回）（小説）、「スケッチ「中国の一日」」以下、中岡敏「倉庫」、冬山加奈代「妾」、井川久賀治「農場」、瀬戸灼「老母」、樹斜通謹「車中スケッチ」、森田文治「乳母車」、三宅寛「宇野桟橋」、那木鶴三「優の家」、平松未地子「銭湯」、錦織里二「野道」、山川院一郎「落日」、三村昂二「何処へ行く」、古城草平「木賃宿」以上、貝原嘉文「よろこび」（詩）、田中英士「火事」（詩）、山崎斎「雨の夜」（詩）、榎南謙一「『母の日』に考へた」（詩）、大山春子「蘭植の歌」（短歌）、御船幸枝「児島の海」（短歌）、栗山照一「うたかた」（短歌）、糸岡研三「今日この頃」（感想）、小山一太「蹴飛ばせ『三号雑誌』」（評論）、「東京通信」、入江清二郎「編集後記」

『中国文芸』一九三六年十月（第一巻第四号）

糸岡研三「密漁船」（小説）、フランツ・コペー作、早苗田隆訳「連隊番号」（翻訳）、「スケッチ五篇」以下、高津啓「土方の一日」、木村潔「留守」、幸田衛「共同田植」、樹斜通謹「車中スケッチ」、目黒良

朗「藺刈人夫」以上、新島繁「ゴリキイ雑感」（感想）、西崎晴男「スケツチ文学への到達」（評論）、山崎斎「愛情」（詩）、稲岡高志「歌わぬ鸚鵡」（詩）、森唯史「久やん」（詩）、城綺美代「憂鬱な七月」（短歌）、三村昂二「十六と言ふ年」（短歌）、新秋雑記以下、小山一太「文学インチキ」、西尾欽一「純情」、糸岡研三「観劇雑感」、入江清二郎「鶴田知也の「コシャマイン記」」、池宗一郎「さいきんの弁」以上、「原稿募集」、守安理「編集後記」

四、『鋲』、『中国文芸』のネットワーク性と地方性の特徴

では、『鋲』と『中国文芸』の中身に立ち入って見ていこう。岡山支部のサークル誌には東京とのネットワークと地方の表象、両方が立ち現れる。岡山支部のサークル誌は、中央と地方の相互乗り入れの場であった。岡山支部員には、東京への作家活動の展開を目指した者もいた。逆に中央の作家たちはまだ弾圧の手のおよんでいない場所として地方を見出した。地元出身の作家たちは弾圧で受けた傷を地方で癒やそうとする傾向があった。

まず、『鋲』と『中国文芸』のネットワーク性を東京からの寄稿文や受贈雑誌の一覧から見ていこう。

『鋲』と『中国文芸』と関わりの深い中央の雑誌として挙げられるのは、『文学評論』と『詩精神』である。双方ともに、転向期において、作家同盟の正式な機関誌でない形を採ることによって、当局の眼を逃れ、プロレタリア文学を継続していた。

『文学評論』は徳永直や貴司山治らの文学案内社の雑誌である。徳永や貴司は当時弾圧により、プロレタリア文学の主流からは追いやられていた。『文学評論』には、「党」の地下活動について行かない者たちが集結していたのである。

『詩精神』は小熊秀雄らが中心になった雑誌で、同様にプロレタリア詩を継続していた。プロレタリア詩の中心となった中野重治は既に転向していた。『詩精神』は政治主張を叫ぶスローガン詩や中野重治らの感情詩とは別のプロレタリア詩の形を求めていた。『詩精神』は政治的イロニーとしての散文詩の可能性を探っていたのである。『詩精神』の執筆者には、一九三〇年代地方サークル運動から登用された新人が多くいた。徳永、貴司らの文学案内社が引き取り、『詩人』に発展するが、廃刊される。

岡山で活動が認められる榎南謙一もその一人である。彼は岡山支部の一員であると共に既に活躍の場を東京に移していた。『中国文芸』（一九三六年五月）には、榎南謙一「菜の花月夜」という詩が掲載されている。榎南健一「菜の花月夜」は『詩精神』の後継雑誌『詩人』（一九三六年十月）に再録されている。

寄稿文の話題にのぼっているのは、作家同盟解散以降のプロレタリア文学のことである。

貴司山治は「若き作家に求む――労働者の生活を描け――」（『鋲』一九三四年十二月号）において、「一九三四年」のプロレタリア文学を振り返り、作家同盟解散以後の出版ネットワークにより、プロレタリア生活を描いた新人作家を挙げる。そして、「インテリゲンチヤ、小ブルジョアジイ」の転向生活でなく、「労働者の生活」を描くことを求める。ここでは転向文学とはまた違う「一九三四年」のプロレタリア文学が提

起されている。ある程度、アマチュア文学の領域では、プロレタリア文学が継続し得た。

岡山出身で既に著名なプロレタリア児童作家であった槙本楠郎も「文学・交遊・著書」（『鋲』一九三四年十二月）において、「こんなにして出してゐるのか、とにかくナルプ解散以後方々から雑誌が出てゐる。量から観ると、ナルプの最も力の強大であつた頃の機関誌に匹敵するのも一・二ある。」[10]とし、作家同盟解散以降のプロレタリア文学の感想を述べている。

小熊秀雄は「甘やかされてゐる新進作家」（『中国文芸』一九三六年五月）という当時のプロレタリア文学の新人の状況に対する自己言及的な詩を書いている。小熊は「いゝ加減怖ろしい現実に／さらに輪をかけろ／亭主の義務を放擲して小説をつくれ／まあ五百枚の小説を毎晩抱いて寝るさ、」と自嘲的に弾圧にふれる。「日本に於けるパンエロフなりが、これまで何人現はれたか、」とサークル誌の新人発掘にも懐疑的である。「農村調査を口実に／ふるさとへの帰心／矢のごとき作家が幾たりぞ、」と自己言及パロディを行っている。小熊は「いやぢやありませんか、文学は男子一生の仕事なりや否やとうたがひだすとは／疑ひだすのは小説を書き始めて／からでは手遅れだ」「文学を始める前に疑ひ給へ、／そして作家になるか、／それともさつさと鞄を抱へて／保険の外交員にでもなりたまへ、」とサークル文学によって文学概念の拡張を行う。そして、「可哀そうに甘やかされた新進作家よ」「所詮イデオロギーといふ／貞操帯をもたない君の作品は／読者に読まれるためではなく／×淫されるために作つてゐるのだ。」と買淫に喩えてその拡散性を表象して詩は結ばれる。小熊の詩は、自己言及的な作品産出の状況が存続していることの証拠と見なせる。

また、岡山支部はサークル誌を中央の雑誌や各地のサークル誌と交換していたようである。受け取った雑誌の一覧を「受贈雑誌」として掲載している。「受贈雑誌」からある程度、岡山支部の雑誌ネットワークを推測できる。

『鋲』（一九三四年十二月）には「受贈雑誌」として、「ろんど、シヤヴアリ、関西文学、進歩、錯綜、鞦韆、九州文化、短歌詩派、白い扉、砦、短歌詩派、詩精神、劇文学、読書、門、文芸街、文学建設者、麺麭、新精神、啄木研究」などの名前が挙がっている。

『中国文芸』（一九三六年十月）にも「受贈雑誌」として「学芸新聞、新協劇団、無花果、上毛文学、台湾新文学、無名作家、汎岡山、新文学、東北文学、関西文学、隼、車、アミーコ、文砦、群、波止場、シュプレヒコール、火曜日、啄木研究、芸術クラブ」が挙がっている。また、『詩人』（一九三六年五月）の広告も掲載されている。

『関西文学』、『東北文学』、『九州文化』はそれぞれ地方作家同盟支部下にあるサークル誌である。『台湾新文学』は楊逵らが創刊した著名なものである。アミーコ（『AMIKO』エスペラント語で友人の意味）は岡山で岡一太が発刊していたエスペラント雑誌である。これらの記事からもプロレタリア文学のネットワークが全国的に出版の上でも存続していたことを確認できる。

次にサークル誌の作品の地方性の表象を検討しよう。『鋲』『中国文芸』には、いずれもプロレタリア文学という枠内で地方性が解釈されていることは留意する必要がある。それらは、プロレタリア文学の地方農村理解に拠っていた。つまり、地方は因習深く、地主権力の強い、封建

制度の領域として、表象される。プロレタリア文学の価値観においては、基本的に地主と貧農の対立しか見出されない。その方針は戦後批判されたように、大衆のとらえ損ないであった。プロレタリア文学にとっては、大衆や貧農は、その集団としての利害を集約して、扇動すれば立ち上がると、盲目的に信じられている対象であった。農村には文化の段階があり、現実で出会い、政治的友敵関係を結ぶ対象はそれぞれ多様なのである。

岡山支部のサークル誌は、メディアとして、非常に単純なプロパガンダとしてしか定義されない。雑誌の本質は政治的意義に集約され、読者層というものをほとんど想定していないと言えよう。地方自身による地方の表象においても、この枠組みから出ていないことは指摘できる。

それでも、この当時地方性が検討されたことは意味があった。地方同人による創作である『鋲』『中国文芸』は、地方都市としての要素や個人の生きる領域としての地方空間の表象が現れている。

入江清二郎「水攻高松城」（『中国文芸』一九三六年五月）は「第二回」しか発見されていない「戯曲」である。古戦場という場所に地方性が読み込まれている。豊臣秀吉の中国遠征を舞台に、高松城に籠る一兵卒の立場から混乱と苦悩を描いた。「水攻高松城」では、毛利側の兵が「吉川、小早川の大軍が来てくれた。……しかし、彼等はどんな戦をしたといふのだ。水攻めを見物に来たのか?」と発言する場面がある。この台詞は、岡山という地方で孤立しながらもプロレタリア文学活動を続ける自らに、敗軍の兵士に仮託したものだろう。援軍として講演隊を派遣した中央への批判にもなっていると考えられる。

そして、秀吉も中国大返しにすぐに取りかかる。高松城攻めに協力した百姓たちは不忠者となじられ、褒賞は払われない。水攻めを手伝った百姓たちは岡山の大多数の農民大衆の姿が比喩されている。「戦はすんだ。どちらが勝つてもお前達のくらしが、よくは成らないぞ！　田や畑を踏みにじられただけだ。」との台詞が存在している。

「水攻高松城」は貴司山治に範をとった歴史小説のスタイルで描かれている。プロレタリア文学には市場的要素は少なかったが、形式の反復可能性があった。貴司山治のプロレタリア歴史小説では、被抑圧者や革命を行った人物が労働者のヒーローとして描かれる。貴司のプロレタリア歴史小説は大衆化の方向性として歓迎されたが、この時期は安直な大衆小説化であったと中央の状況では既に否定されていた。「水攻高松城」は、崩壊した作家同盟の方針をすり抜け、歴史プロレタリア大衆小説を反復したものと読める。

中岡敏「馬」（『中国文芸』一九三六年五月）は、後年のサラリーマン小説のような、中間階級を対象とした興味深い短編である。主人公の龍介は岡山で働いているが、ある日「馬」に任命される。「馬」とは、会社に定期券を出してもらい、メリンスの衣料を大量に運ぶ役割であった。そもそも当時は衣料などの搬出の一部は、鉄道輸送やトラック輸送ではなく、個人輸送に頼っていたらしい。龍介は「馬」に任命されたことを周囲から「あんたはんくらい出世の早い人は珍しうおつせ」と褒められる。会社としても定期代の出費のある「馬」は重要な役目であった。龍介は大変な苦労をしながら大量の衣料を電車に乗り込んで輸送し、京都まで届ける。最後に龍介は帰途の大阪駅で大量のメリンスに押しつぶされてしまう。当時のラッシュアワーの中で衣料を個人輸送することは不可能に近かった。資本主義に対する明瞭な反抗こそ描かれ

ないものの、労働を個人への重圧の問題として測り、描写した優れた短編と言えよう。

「馬」は恐らくは新人の作であり、文章的に拙い部分が見受けられる。個人の体験を書いたのではないかとも考えられる。サラリーマン小説のような大衆の生活体験に拠った創作がアマチュア的に噴出したと言えよう。

岩下作雄「清算」（『中国文芸』一九三六年五月）はおそらく岡山の廓で働く女性を題材にした小説である。彼女たちは「でも此んなとにぶ（ママ）ちこむ親が悪いの、きつと、えゝきつと」と話し合う。女性たちはつらい生活を送っているが、「萬理ちやんの奴のように懸命で働いたつて……楼主肥しよ――」とその搾取にも気付いている。五年なり辛抱するしかないと登場人物たちは話し合う。ある日登場人物の一人である「信ちやん」は廓から脱走し、そのまま線路に飛び込んでしまう。「そう云へば、あのときだつたろう、汽笛がながいこと鳴つていたが」との回想で小説は閉じられる。

プロレタリア文学に廓を描いた小説の例は少ない。「清算」はどちらかと言えば、大正期の悲惨文学に近い形式を持っている。「清算」は、地方としての岡山を、都市化され、男性権力の機能する、悲惨なジェンダー問題の起こる場として描いたのである。

糸岡研三「密漁船」（『中国文芸』一九三六年十月）は漁師に取材した岡山の地方性を表象した短編である。「密漁船」の主人公・啓造は漁師であるが、漁業組合運動で逮捕された経歴があった。貧困から啓造たちはデモを行い、町長以下に反抗する。だが検挙された啓造は「謀反人」として、村でも白眼視を受けることになる。鷲羽山が国立公園になり、観光客がやってくるが、期待されていた金は隣の町で消費され、村は豊かにはならない。一九三〇年代のモダンな漁村の状況が表象されていると言えよう。啓造は友人の漁師に密漁をそそのかされ、一旦は断る。だが、啓造の妻の病状が悪化する。啓造は妻を「このまゝ死なしたくない」と考え、密漁に駆けだしていく。妻は啓造を呼び止め、取り囲む村人にむかって「人を見殺しにするのか――誰だつてお互（ママ）えのに」と語る。啓造は密漁を思い止まり、「俺達は、俺達の力で、俺達の生活を築き上げよう」と再び決意するところで小説は終わる。岡山の漁村の貧困と因習はリアリティを持って鋭く描かれていると言えよう。

「密漁船」は小林多喜二の「蟹工船」のような小説に近いと言える。瀬戸内海に面した岡山の半農半漁に立場は置き換えられている。密漁という犯罪領域がプロレタリアに近接したものとして描かれることは、形式の反復として興味深い。ただし、病床の妻が起き上がって、近所の人間に怒鳴り返し、再び運動を志すというラストは、弾圧後の価値観を加えたものであろう。

『中国文芸』は後半で「中国の一日」という「スケッチ」特集を開催する。「スケッチ」は、そもそもツルゲーネフや島崎藤村などにおいて試みられたジャンルである。形式としては古典的なものであった。短い文章とリアリズムで、風景を描くものである。

しかし、西崎晴男「スケツチ文学への到達――『中国の一日』に関する若干の感想――」（『中国文芸』一九三六年十月）によれば、ゴーリキーや彼「に私淑する徳永直」によって提唱された作家同盟崩壊後のプロレタリア文学理論であった。西崎は『東北文学』の「津軽の一日」特集（一九三五年月不明）、『文学評論』の「東京の一日」特集（一九三

六年一月）に、その流れを見出している。『文学評論』「東京の一日」特集は徳永直がリードしていた。徳永はゴーリキーがその死の直前に、サークル活動の一環として、大衆に「スケッチ」を行わせるよう、講演したとしている。

ソ連のゴーリキーの伝聞情報と『文学評論』のリードによって、「中国の一日」も企画されたようである。ここでの各地方サークルのスケッチ文学の特集が、一九五〇年代サークルの「記録」運動につながっていく。スケッチという形式は、大衆参加可能なジャンルとして、左派から政治的に再び見出されたのである。

スケッチ特集は『中国文芸』一九三六年七月と一九三六年十月の二回開催された。以下、その内容を少し見ていこう。

井川久賀治「農場」（『中国文芸』一九三六年七月）においては、「たれが想像しようぞ／黒い麦飯から白い湯気が立ち／固い砂まぢりの飯を焚くにも赤いほのほ／黒い煙の出ることを？」と自然美の中に隠された農村の貧困を描いた。

森田文治「乳母車」（『中国文芸』一九三六年七月）において、どぶに落とした味噌を拾おうとする貧しい老人の姿を描いている。一つの強烈な印象によって貧困が表現されていると言えよう。

目黒良朗「蘭刈人夫」（『中国文芸』一九三六年十月）においては、陽光の差す岡山の名物である蘭の収穫が描かれた。実際に蘭を手に入れるのはブルジョアであり、「蘭刈」たちは貧しかった。「蘭刈」は「ぼい帰」（ボイコット帰還の意味）することにおいて、絢爛豪華な蘭が手中で全く意味のないものと化す光景が描かれた。「蘭刈人夫」はストライキの憂鬱が象徴的に描かれていると言えよう。

どれも岡山の農村や都市の情景などを対象として、印象的な一瞬が記録されている。こうした企画のスケッチという短い作品により、大衆参加できるプロレタリア文学の形式に進化している様子がわかる。

『鋲』『中国文芸』の作品は地方文学と言えるが、同時に形式としては全国的な文学史の流れにしたがったものであった。プロレタリア文学による全国各地のアマチュア文学への注視があった。作家同盟岡山支部はプロレタリア文学の形式の適用が地方の風景において可能かどうかの実験場であったと言えよう。

『鋲』『中国文芸』の表象は、作家同盟解散以降、独自にプロレタリア文学を継続し、新たな形式を試み、地方の葛藤を描いていると言えよう。

五、おわりに

これまで岡山支部の成立の歴史と『鋲』『中国文芸』の確認できる内容を見てきた。『鋲』や『中国文芸』は作家同盟解散以降の年次に発表されている。岡山支部の活動は党の指示があったとは考えにくく、むしろ、『詩精神』や『文学評論』などの、プロレタリア文学のネットワークが生かされた結果であった。

中央では壊滅的打撃を受け、転向しかなかったプロレタリア文学が、地方アマチュアサークルではまだ存続している姿を見ることができる。

また、後の記録文学ともジャンルを重ねている、「スケッチ文学」が試みられた。これは『文章世界』などの投稿と一九五〇年代の映像記録

を結ぶミッシング・リンクになり得るかもしれない。

『鋲』『中国文芸』に表象された地方性とは、あくまでプロレタリア文学の価値観によるものであり、地主の封建制度批判が中心であった。しかし、楽観的に地方を描くのではなく、葛藤を内包した地域としての表象が多く見られたことは成果であろう。

一九三〇年代サークル誌は、中央と地方の相互乗り入れの場であった。それは日本文学全体の問題であり、同時に地方文学であった。日本文学が地方やアマチュアを問題とした時期であった。一九三〇年代とは、アマチュアやローカルな作家に眼差しが向けられた一時期であった。一九三〇年代サークル活動の大衆への全体性はファシズムに通じていなくはない。一九三〇年代サークル活動の参加者は、後に個人としてはファシズムの礼賛者としての記録を残すことが多い。一九三〇年代サークル活動では全く知識人役割は定義されなかった。全くの大衆との同一化が図られたのである。一九三〇年代サークル活動の参加者の全面的転向の要因は、大衆との距離感や一体感の質的差異による。やがて戦後民主主義的な知識人主体として再び文学者が見出され、大衆との溝は深くなる。一九三〇年代には、プロレタリア文学の方針としての地方への注視があった。そのような形でなければ、地方文学というものはおよそ文学史に立ち現れなかったであろう。

注

（1）四・一六事件とは、一九二九年四月十六日における日本共産党に対する一斉検挙である。この日、共産党関係者３００人が１道３府２４県において一斉に検挙された。鍋山貞親、三田村四郎、佐野学が逮捕され、中央委員を含む全国の活動家が逮捕された。（『社会・労働運動大年表』労働旬報社、一九九五年六月参照。）

（2）森田綾雄　一九〇〇―？　大正時代からの岡山プロレタリア文学運動の同人。岡山県久米郡久米町生。大阪の桃山中学、関西大学専門部などで学ぶ。関西で江商のメリヤス部に勤務していたが、心臓を悪くして帰郷。一九二二年地元のアナキスト仲間と文芸講演会を開いて好評を呼ぶ。一九二四年、岡山無名作家連盟を樹立。まもなく上京し、日露芸術協会の事務員として働きながら、吉行エイスケや辻潤と交流。また体調を悪くして帰郷。岡山作家同盟の中心人物として活躍することになる。（水野秋『岡山県社会運動史８　暗い谷間で』労働教育センター、一九七八年十月参照）。

（3）岡一太　岡山エスペラント運動の代表的人物。一九二〇年、岡山エスペラント会設立。一九三一年、ポエウ岡山支部設立。当時、関西中学校で作文の教師をしていた。機関誌『AMIKO』などを発行する。モップル（赤色救援会）岡山支部再編に尽力。戦後も語学教育の普及に尽力する。（水野秋『岡山県社会運動史８』前掲）

（4）松崎竜一　全協のオルグ松崎久馬次の弟。文化活動に興味を示し、岡山プロキノ同盟発足当時のトップの一人であった。（水野秋『岡山県社会運動史８』前掲）

（5）同前峯男　一八九一―？　都窪群の出身。両親と死別し、困窮。岡山二中に進学。村役場に入る。岡山プロキノの運動に参加。小説も執筆。戦後、玉野職業安定所長。（水野秋『岡山県社会運動史８』前掲。）

（6）岡本武夫　片岡鉄兵の弟子で中央と岡山を結びつけ、岡山支部を発足させた人物。岡山の演劇サークル員だった宇原新次は「文化運動の思い出　前線座の公演活動」（『岡山県社会運動史研究会会報』一九八五年八月第十

四号）において、当時の芝居の総括会議において、「岡本武夫が「わしもやられてのう」と、さも大者らしく云ったのであるが、その発言を聞いて、腹の真底から怒がこみあげたのである。岡本武夫は当時「ナルプ」の活動家ではあった。しかし、そのような安っぽい子供じみた英雄主義？が横行していた」と回想している。地方サークルと中央へ進出しようとする岡本武夫との間で軋轢があったのだろう。

（7）小野治夫　東洋文化大学教授小野民樹の父親。岡山県の藤田農場争議に参加。小野民樹の回想が「吉備びと」（『映像文化の未来を考える　シネリテラシー』第一巻第一号、早美出版社、二〇〇九年九月）に残る。

（8）槙本楠郎　一八九八―一九五六　岡山生。プロレタリア童話作家。作家同盟員。『詩精神』同人。早稲田大学予科を中退。一九二八年作家同盟に加盟。一九三二年、弾圧の強化によって脱退。著名なプロレタリア童話作家であり、著名なプロレタリア童話評論家であった。帰郷して岡山支部に参加。主要著作に『プロレタリア児童文学の諸問題』などがある。（『近代日本社会運動史人物大事典』日外アソシエーツ、一九九七年一月参照。）

（9）田中英士。後に中央で活躍するプロレタリア小説家。ドイツでも作品が翻訳されていた。和田崇による科研費研究「戦前期ドイツにおける日本プロレタリア文学の翻訳と受容」がある。

（10）「ナルプ」とは作家同盟（ＮＡＬＰ）の略称。

（まんだ　けいた）